

横浜市小学校社会科研究会

学年部会

## 研修会記録

第3号

令和5年 9月6日

横浜市小学校教育研究会

会長 濱田 哲也

横浜市小学校社会科研究会

会長 加藤 和之

同 学年部長 金井 伸一

【提案日時】

8月1日(水)

提案 小島 早紀 先生(山元小)

【会場】

フォーラム南太田

司会 松永 快哉 先生(市場小)

記録 菅原 大樹 先生(上末吉小)

1 提案理由 単元名

単元名「国づくりへの歩み ～大仙古墳から考える国づくり～」

2 提案者より

【視点①について】

資料から人々の生活を想像し、人々の思いや願いについて考えることで問いを生み出す

- ・想像図は教科書を活用し、一人ずつの時間をしっかりとるようにした。
- ・「自分だったら…」と自分の立場を考えるようにしていき、当時の人々の行動の意味や思い、願いから問いを生み出すようにしていった。

子どもの問いを引き出す資料提示と問題作り

- ・大仙古墳の大きさを学区と比較した資料を提示したところから問題意識が生まれた。  
「どうして一人のためにこんなに大きな…」

【視点②について】

子どもの見取りを大切にした1時間の授業づくり

- ・子どもの見取りは座席表を活用し、毎時間の記録をしている。
- ・「古墳をつくるために働いていた人について考えたこと」について子どもの記述を見取り、捉え方の違いを分類することで問いにつなげることができた。  
「大きな権力をもつ仁徳天皇は…」どんな人物かは感覚だが、権力の大きさがポイントにしていきたいと考えた。

- ・本時では、仁徳天皇がどのような人物かを考えることを通して、日本書紀から当時の様子や当時の天皇について(強制・悪者というだけでなく)捉えていきたかった。

### 3 協議

- 話し合いの中で意見が変容しており、主体的に考えられる資料であった。
- 古墳と学区の比較は、実感を伴うことができてよかった。
- 子どもたちの見取りを丁寧に行っていたことで、子どもたちの考えから自然な流れで問いが生まれていた。
- 「自分だったら…」という視点で話し合いが進んでいたため、どこかで「天皇の力の大きさ」に焦点化できるような事実に戻ることが必要だった。
- 神話の取り扱いについて 言葉は不確かではあるが一つの資料である。  
→子どもたちは、300年後に作られたものということから資料の質を問う発言や批判的な見方もしていた。
- 根拠となる事実を複数出せるようにする。(他の古墳の様子、古墳から出土したものなど)
- 思いや考えだけだと話し合いにも限界があるので、今回は「支配の広がり」に重点を置く。  
→**古墳の分布** 3世紀、4世紀、5世紀とだんだん広がっていく  
6世紀になると作ることがなくなる  
引いた視点からも見ることで「天皇の力の大きさ」「国づくりへの歩み」が見えてくる。

### 4 講師の先生方より

協働的な学びとは、一つの物事を多面的・多角的に考えていくことである。歴史学習では、人物の動きと文化遺産に着目することで、人物中心の歴史学習につながってくる。今回の学習では、文化遺産である古墳に注目し、「国」ができていく様子を捉えていく。問い→仮説→検証の学習過程の中で多様性を生かし、協働的な学びを通して解決していくことが大切である。

また、学んだことを生かしていくためには、授業分析を通して子どもの事実に学ぶことが大切である。授業分析では、各文節に題名を付けることで授業の構造が分かりやすくなる。「自分だったら？」と自分なりの根拠をもって当時の人々の気持ちを想像することは予想を立てることであり、根拠を伴った検証が必要になる。今回の単元・教材では、むらからくにへと変化したことを理解することが大切で、「古墳の広がり」から捉えることができていて、「むらからくに」の変化を具体的に捉えることができていた。人物に着目することは、歴史的理解を具体的にし、学習に対する興味を高めることにつながる。

歴史学習とは、少ない事実を想像力豊かにつなげて、自分で社会像を構成する楽しさを味わうことにある。一人一人の考え方の違いを生かしながら、当時の社会像に迫っていく姿に今後も期待している。

文責 菅原 大樹 (上末吉小学校)